ジョージ・ハーバートの聖職者になることへの逡巡（前）

――ジョン・ダンの「聖職者になったティルマン氏に」と関連して――

山根　正弘

はじめに

17世紀イギリスの詩人・説教者ジョン・ダン（John Donne, 1572-1631）に、「聖職者になったティルマン氏に」（"To Mr. Tilman after he had taken orders"；以下「ティルマン氏に」あるいは"To Mr. Tilman"と略記する）と題する詩がある。この詩は、エドワード・ティルマンの手紙に対するダンの返事である。ティルマンはケンブリッジ大学ペンブルック・カレッジのフェローであったが、英国国教会の聖職者となるにあたり、聖職者に相応しくないと自ら感じていて、聖職入りをためらう気持ちを打ち明けた[1]。彼は1618年12月に司祭の下位職である執事（deacon）に、そして1620年3月には司祭（priest）に就任している。ところが、ダンの返歌は、ティルマンのそのような苦悩を無視した形で話が展開されている。つまり、当時僧職は上流階級の人々から軽んじられていたが、その果たす役割がいかに立派であるかを示すことにより、あえて僧門の扉を叩いたティルマンを激励する内容となっている。

ダンは世俗的な立身出世を追い求め、自身の能力・才能に見合った国の要職を得るため様々な活動を展開したことで知られる[2]。だが、その努力も空しく、結局1615年1月に国教会の聖職者となった[3]。ダンも最終的に宗教界に身を投じることを迷っていたと考えられるが、ジェイムズ一世の強い要望には抗えなかった。しかし、司祭職はダンが当初より望んでいたものではなかったが、一旦その職に就いてみると、彼の才能・能力に見事に合致していて、神が彼に命じた天職と受け取るように

なった。それから数年後、ティルマンの聖職者になることへの迷いを題材にして、返歌の形を借りながらも全く独自の発想で、ダン自身が聖職者になったことに対する釈明とその意義を表明したものと考えられる。

ダンの影響を直接・間接に強く受けた宗教詩人ジョージ・ハーバート（George Herbert, 1593-1633）は、ケンブリッジ大学の大学代表弁士そして国会議員にまでなった地方出身のエリートであったが、最後はソールズベリー近郊の僻村ベマトンの教区牧師となった。伝記作家アイザック・ウォルトン（Izaak Walton, 1593-1683）によると、ハーバートは宮廷での昇進を夢見ながらも、自身の才能を神の栄光に捧げるという信条を捨てきれず、どちらの道を選ぶべきか逡巡し心の葛藤を経験したという[4)]。名門の出で、しかも才能に恵まれたハーバートが、政治の要職を諦め神の栄光を讃えるため、身を落として片田舎に隠遁し教区民のために牧師になったという見方は、以降支配的となる[4)]。もし、ハーバートが聖職者になることをためらったとすれば、その原因は何であろうか。ティルマンのように、聖職者に相応しくないと自ら感じていたのであろうか。それともダンが提示したように、当時社会的に蔑まれていたがゆえに、進んで聖職者となることにためらいを感じていたのであろうか。以下に、ハーバートが聖職者になることを逡巡した理由を、先例とも模範ともなったダンの「ティルマン氏に」を手がかりに、探ってみたいと思う。

I ダンからハーバートへ—宗教的なパロディ

ダンの「ティルマン氏に」は、1635年出版の詩集（第2版）に初めて収録されるが、先に述べたように、国教会に属する聖職者が俗世間の人々から軽蔑されている現状を示し、その蔑視を克服したティルマンの精神的立派さを称賛した宗教詩である。その冒頭、テーマが縮約された形で示されている。

Thou, whose diviner soule hath caus'd thee now
To put thy hand unto the holy Plough,
Making Lay-scornings of the Ministry,

Not an impediment, but victory... ("To Mr. Tilman" 1-4)

(あなたの神々しい魂が、今や、あなたの手に聖なる鋤を／かけさせて、あなたは、聖職者となったのである。／俗世間の人々のなかには、聖職者を軽蔑する者もいるが、／それを克服して、障壁とはしなかったのである。)[5]

「手に鋤をかける」とは、聖職者になることを意味する[6]。聖なる鋤は人の心を耕し、信仰を深めるということであろう。

続いて、ティルマンが聖職に就く前と後では、彼にどれほどの相違があるのか、すなわちどれほど精神的に成長したのかが、ダン流の比喩を用いて表現される。例えば、貿易船が長く苦しい航海のあと、鉄と布を売りインドから宝の山を積んで帰ってきたようなものだと。けれど、いくら精神的に豊かになったとしても、人間としての本質が変化したわけではなく、新しく冠を戴く王が、コインの材質は変えないのに、その上に刻む顔だけ変えるように、そのようにティルマンも叙品の戴冠式のとき、キリストの刻印に替えただけであるという[7]。そして、聖職者は俗世間の位とは別に、神のヒエラルヒーでは、神の遣い、つまり「天使」の位階にまで引き上げられる。

Or, as we paint Angels with *wings*, because
They beare Gods message, and proclaim his lawes,
Since thou must do the like, and so must move,
Art thou new *feather'd* with celestiall love?
("To Mr. Tilman" 19-22; italics mine)

(また、神の意思を伝え、その律法を告知するため／天使を翼あるものと描くように、／あなたも同じような働きをして、同じように動かねばならないので、／天上の愛の翼を新たにもらったのであろうか。)

本質は変わらなくとも、新たな刻印を押した聖職者は、筆舌に尽くせぬほどの喜びを身に感じ、「天使」と同列であるのに、なぜ世間の人々は聖職者を蔑視するのかと、

ダンはさらにもう一度、問い直す。

> Why doth the foolish world scorne that profession,
> Whose joyes passe speech? Why do they think unfit
> That *Gentry* should joyne families with it?
> As if their day were onley to be spent
> In *dressing, Mistressing and compliment...*
>
> ("To Mr. Tilman" 26-30; italics mine)

(なぜ、愚かな世の人々は、言葉で表現できないような／喜びを与える職業を軽蔑するのか。なぜ、ジェントリーが／神の家族の一員になることを適切ではないと考えるのか。／その彼らは、あたかも終日、衣装に凝り、恋人と戯れ、／お世辞を言うのに費やすというのに。)

聖職者を蔑視する世間の人々、特にここでは、"Gentry" という語から連想されるように、額に汗して労働することのない地主階級、ジェントリーが念頭に置かれている。ダンは貴族の地位・身分に憧れを抱いたが、結局夢は果たせず、聖職者になった。その怨念にも似た感情のゆえにか、上流階級の暮らしぶりを皮肉めいた口調で断罪しているかのようだ。

酔生夢死の享楽的人生を送る貴族批判に使われた、「衣装に凝り、恋人と戯れ、お世辞を言う」というダンの語句を、ハーバートが自分の作品に引用している。彼の詩集『聖堂』(*The Temple*, 1633) に納められた「教会の袖廊」("The Church-Porch") は、当代のジェントリー階級の子弟、特に弟のヘンリー・ハーバートに、その行動・振る舞いを教訓的に説いたものである。彼あるいは彼らに向かって、非生産的な怠惰を捨て去るように教導する。

> Flie idlenesse, which yet thou canst not flie
> By *dressing, mistressing, and compliment...*
> God gave thy soul brave *wings*; put not those *feathers*

Into a bed, to sleep out all ill weathers.

("The Church-Porch" 79-80, 83-4; italics mine)

(怠惰を吹き飛ばせ、けれども、それは、着飾ったり、／恋人と戯れたり、お世辞を言ったりすることで果たせるものではない。／神は君の魂に素晴らしい翼を与えられた。悪天候が通り過ぎるまで、／その羽を、ベッドに押し込んで、寝て待ってはいけない。)[8]

二つの詩に共通して、"dressing, mistressing, and compliment" の他、"wings" と "feathers" があり、さらにこのあと91行目には "Thy Gentrie bleats" という語句まで登場するので、ハーバートがダンの「ティルマン氏に」を意識していたことは明白である。三つの言葉の組み合わせが同じであるばかりか、無為な生活を送ることへの批判という同じ文脈に置かれている。となれば、これは、もはやダンがハーバートに及ぼした直接的な影響であるばかりではなく、ハーバートが意識的にそれと判るように嵌め込んだ、ある種のパロディであろう。

さらに、ハーバートは、三つの組み合わせのうち二つ、即ち「着飾る、お世辞を言う」を、散文の作品『田舎牧師』(*The Country Parson*, 1652) で用いている。その第32章で、英国全土に蔓延する最大の罪悪は怠惰であると糾弾したあと、仕事に就くことの重要性を説く。なぜなら、職に就いていなければ、暇をもてあそび、居酒屋で酔いつぶれたり、売春宿で娼婦を買ったりして罪を犯すことになるので。したがって、職に就いて社会の役に立つように指南する。親の財産を継げない次男以下については、特に次のように諫める。

To them [younger brothers], after he hath shew'd the unlawfulness of *spending the day in dressing, Complimenting*, visiting, and sporting, he[the country parson] first recomemends the study of the Civil Law... (*Works*, 277; italics mine)

(彼らに対しては、着飾ったり、お世辞を言ったり、訪問したり、遊んだりして時を浪費することの非合法性を示したあと、田舎の牧師は、最初に民法の勉強

を奨めるべきある。)

無為な生活・怠惰は、ハーバートが抱いていた仕事に対する考え方に反するもので[9]、「着飾る、お世辞を言う」は、洒落者、享楽人の特徴として、ここでも非難されている。ハーバートはそのフレーズに強く惹かれて、ダンに呼応する形で、さらにティルマンに対する返歌の返歌として援用したのであろう。

ハーバートとダンは、母親マグダレン・ハーバート夫人を介しての直接的な交友関係があったが、そればかりか、二人とも第3代ペンブルック伯爵 (William Herbert, 1580-1630) を中心とした派閥 (faction) 兼文学サークル (coterie) という大きな輪の一員であった。つまり、ダンはハーバート夫人の庇護のもと、ある時期ペンブルック伯派閥とも係わりがあった[10]。伯爵の母親で、サー・フィリップ・シドニーの妹、メアリー・ハーバートが1621年に亡くなったとき、ダンは彼女の追悼と自分の出世を託して、「サー・フィリップ・シドニーとその妹ペンブルック伯爵夫人による詩編の翻訳について」("Upon the translation of the Psalmes by Sir Philip Sidney, and the Countesse of Pembroke his Sister") という詩を献呈している。だが、その件でダンが期待した人事は動かず、彼は別筋でその年の12月、セント・ポールズ大寺院の首席説教者 (dean) になり、ペンブルック伯のサークルから遠ざかっていく。

ハーバートがペンブルック伯ウィリアム・ハーバートの尽力で田舎の教区牧師に就任したのは、1630年4月16日である。僻村ベマトンは、地理的には、ペンブルック伯の邸宅ウィルトシャーのウィルトンとソールズベリー大聖堂の中間地点にあり、歩いて通える距離である。その伯爵は、残念ながら、ハーバートが牧師に叙せられる6日前に亡くなり、彼の弟フィリップ・ハーバート (Philip Herbert, 1584-1650) がその跡を継ぎ、第4代ペンブルック伯爵に就任するが、庇護は相変わらず得られた。伝記作家のオーブリーによると、ハーバートはウィルトン・ハウスのチャプレン (chaplain) であったという[11]。フィリップの再婚相手アン・クリフォード夫人 (Lady Anne Clifford, 1590-1676) が残した『日記』によると、結婚生活は幸せであったとはいえず、孤独を感じていたようだ[12]。ハーバートは職務を兼ねてウィルトン・ハウスにご機嫌伺いに通い、また彼はリュートの名演奏家でもあったので、

時に夫人の前で詩とともに音楽を披露したのかもしれない。

ペンブルック伯の文学サークルは、母親のメアリー・ハーバート（自ら文人で文芸の庇護者）から引き継いだ文学サロンで、マニュスクリプトの回覧ばかりではなく、詩の朗読・朗唱が行なわれていた。時には、詩人自身が、あるいはまた音楽家が節を付けて吟唱したという。ティルマンがケンブリッジ大学ペンブルック・カレッジのフェローであったことを考えれば、閉じたサークル内で「聖職者になることへの逡巡」というテーマが、それぞれの人生と絡めて文学的虚構として扱われたのかも知れない。ペンブルック・サークルは、文学的な才能を発揮する場となり、ことによると各人の能力に見合った官職が得られた。詩人たちは、一般に流布している節回しに、各自が独自の歌詞を付けて、現代的に言えば「替え歌」を披露した[13]。また時に、相手の作品で関心度が高いフレーズを巧妙に取り入れたり、中心的なテーマを別の形で扱ったりして、サークル内の人々にそれと判るような、パロディを創った。特に、ダンからハーバートへの橋渡しは、上流階級批判の「着飾る、恋人と戯れる、お世辞を言う」という語句がキュウとして機能したと考えられる。

ダンの「ティルマン氏に」が、ティルマンの手紙の返事ではなく、彼自身をも含めて、聖職者にならざるを得なかった人たちを激励する意図をもって書かれた文学的な虚構であったなら、ティルマンが悩んでいた問題、つまり聖職者となるに相応しい身であるのかという疑問に答える筋合いもなく、また、なぜ聖職に就くのが敬遠されるのか、その理由を明らかにする必要もないはずだ。実際、ダンの詩では、聖職の尊さと偉大さは宣揚されているが、聖職者としてどんな人が相応しいかその人物像は示されず、聖職者が嫌われる状況は述べられているが、その理由は説明されているとは言えない[14]。

II 聖職者に相応しいか

ジョージ・ハーバートは、1593年4月3日、ウェールズのモントゴメリーで、ジェントリー階級の五男としてこの世に生を受けた。長兄のエドワード・ハーバートが嫡子として親の財産を受け継ぎ、ジェイムズ一世の命を受け駐仏大使を務め、のち

にチャーベリー卿に叙せられるなど社会的に成功したのとは対照的に、その天賦の才にもかかわらず、田舎の一介の聖職者としてその生涯を閉じた。彼が自ら進んで聖職者になったのか、そうならざるを得なかったのか、またその時期はいつのことなのか、議論の分かれるところである[15]。先に触れたように、大いなる精神的な葛藤を経て、田舎に隠遁し神の僕となることを決意した、というのがウォルトン以来の見方である。しかしながら、ここ十数年の間に従来の見方が革新的に変わってきているのも事実である。つまり、ハーバートは田舎に隠遁するどころか、積極的に宮廷や政治に関わり、さらなる立身出世を窺っていたという[16]。だが、もしウォルトンのハーバート伝に読者を惹きつけて止まない説得力があるとすれば、それは一体何であろうか。教訓的なキリスト教聖人伝にみる人間精神の原型的な題材が扱われているからであろうか。以下に、伝記的事実を踏まえながら、ハーバートが経験した心の葛藤を手紙や作品の中に探ってみたいと思う。

ハーバートは、ごく早い時期から、その才能を神の栄光に捧げようという気持ちを持っていた。1610年の新年、ハーバートがまだ16歳でケンブリッジ大学の学生であったとき、母親に2編のソネットを添えて手紙を送った。その中で彼は、当世流行の世俗的な恋愛詩ではなく、宗教詩を書く決意を表明している[17]。

1614年に出身カレッジのマイナー・フェロー（minor fellow）、16年にはメイジャー・フェロー（major fellow）となる。大学の規定では、メイジャー・フェローとなるには、7年以内に国教会の聖職者になるか、さもなくば、フェローの地位を諦めるか、そのどちらかに同意しなければならなかった。

1618年、彼が母校ケンブリッジのレトリックの講師（praelector）を務めていた24歳のとき、3月18日付けの手紙で、ハーバートは、母親の再婚相手であるジョン・ダンヴァーズ（Sir John Danvers, c. 1588-1655）に、健康状態に多少の不安を抱えているが、聖職者になる心づもりであることを、打ち明ける[18]。

ところが、1620年にハーバートは、大学の要職である大学代表弁士（public orator）となる。在職中の逸話が残っている。同時代の伝記作家、アイザック・ウォルトンによると、ジェイムズ一世が大学に書物を寄贈し、そのお礼の手紙を代表弁士であるハーバートが書くことになった。あまりにも見事なラテン語に陛下は感嘆

し、側近のペンブルック伯ウィリアム・ハーバートに手紙の書き手を問い合わせた。伯からハーバートの学識と才能を聞いた陛下は、「大学の宝」と讃えたという[19]。代表弁士の職は、このように国の要人と接する機会に恵まれ、それを踏み台にして国の要職に就くことができる、立身出世を望む者にとっては重要な職であった。しかし、やはり義理の父に宛てた手紙によると、果たす役割の重要性にもかかわらず、それに見合った給金ではなく、生涯続ける職ではなという[20]。この頃ハーバートが置かれていた状況が、「苦悩」(1) に寓意的に表されている。

Whereas my birth and spirit rather took
The way that takes the town;
Thou didst betray me to a lingering book,
And wrap me in a gown.
Before I had the power to change my life. ("Affliction" [1] 37-42)

(生まれや気質からすると、むしろ都市へ通じる／道を辿ったであろうに。／それなのに、あなたは私に書を読みふけるようにし、／ガウンで身を包んだ。／私は闘争の世界に巻き込まれてしまった、／自ら生き方を変える力が身に付く前に。)

1624年、31歳でハーバートは、故郷の都市選挙区モントゴメリー選出の代議士となり、2月19日から5月29日まで議会に出廷する。この時すでに、ケンブリッジ大学が定めたフェローの聖職叙任に関する規定の期限を超え、しかも聖職者にもなっていなかったので、ハーバートは世俗的な昇進を、まだ捨て去ってはいなかったと考えられる。だが、そのあと何か特別なことがあったに違いない。その年の11月か12月に突然、ハーバートは国教会の執事となった。これは、先に述べたとおり司祭の下位職で、僧禄は得られるが宗務を義務づけるものではなく、この叙任をもって聖職入りの決意と見なすわけにはいかないが、人生の大きな転機であった。

ハーバートの親戚でもあったペンブルック伯ウィリアム・ハーバートは、プロテスタント系派閥の中心者で、事あるごとにスペイン親派のジェイムズ一世の寵臣バッ

キンガム公ジョージ・ヴィリアーズ（George Villiers, Duke of Buckingham, 1592-1628）と敵対していた。1623年のこと、チャールズ皇太子とバッキンガム公は、スペインの皇女ドナ・マリアとの結婚の交渉を進めるべく、マドリッドに赴く。その目的は、ジェイムズ王の娘エリザベスがドイツのプロテスタントでプファルツ選帝侯のフリードリッヒ五世に嫁いでいてその窮地を救うためであった。おりしも、ドイツは1618年に勃発した三十年戦争の真っ最中で、新教と旧教が雌雄を決しようと戦っていた。イギリス国内では、皇太子が異国の地で暗殺されるのではないか、あるいは後の国教会の首長がスペインの皇女との結婚のためカトリックに改宗するのではないか、との動揺が広がる。だが、結局、チャールズとバッキンガム公は皇女をイギリスに連れ帰ることはなく、二人はスペインとの戦争の意思を固めていった。ジェイムズはあくまでもスペインとの同盟をもとに平和を望んでいた。そして翌年の2月、ジェイムズは戦争と平和を議題とする議会を招集する。これまでイギリスでは、外交問題に関しては、王の一存で決定されてきたが、王が今回初めて議会の意見に耳を傾けるという前例を作ることとなった。

議会の大半は、戦争の費用を負担する痛みはあったが、宗教的信条からスペインとの交戦に賛成であった。その旗頭がチャールズ皇太子でありバッキンガム公であった。ペンブルック伯は宗教的信条からすれば反カトリックであったが、植民地貿易に手を出し投資していたので戦争は反対で、スペイン贔屓のジェイムズに荷担した。戦争が議会の趨勢であったので、ペンブルック伯派閥はこの頃政治的に旗色が悪くなり始めた。1624年4月には、ハーバートの兄で駐仏大使のエドワードが、その任を解かれフランスから呼び戻される。6月には、ペンブルック伯を軸にハーバートの友人・知人によって運営されていたヴァージニア・カンパニー（新大陸の入植と貿易を扱うベンチャー企業）の認可が、ジェイムズ王によって突然取り消され、ヴァージニアは王の直轄植民地になる。この件を契機に、ケンブリッジ以来の友人で同じ議会に出廷していたニコラス・フェラー（Nicholas Ferrar, 1592-1637）が、ハンティンドンシャーのリトル・ギディングの地に、宗教共同体を設立し隠遁状態になった。また、この株式会社に出資をしていたハーバートの継父ジョン・ダンヴァーズは、一方的な認可取り消しに怨恨を抱き続け、後の1649年、チャールズ一世

の審問に立ち会ったとき、王の死刑執行状に署名し、弑逆者の一人となる。さらに、ハーバートの弟で宮廷饗宴局長のヘンリーは、同じ6月に、トマス・ミドルトン(Thoma Middleton)のスペイン大使及びジェイムズ一世のスペインよりの政策を揶揄した劇『チェス・ゲーム』(*A Game at Chess*, 1624)を意図的に認可したのではないかと嫌疑がかけられ、取り調べを受ける[21]。ハーバートは、ペンブルック伯の引き合いで、いざ議会に出廷してみると、その凄まじいまでの勢力争いと、その戦いに敗れた者が味わう悲哀を目の当たりにして、その政権抗争に絶望して、その隠れ蓑に国教会の執事になったのではないかと思われる。

神の栄光に身を献じる思いのあったハーバートにとって、友人フェラーの理想的な宗教生活は、聖職入りへの呼び水となったはずである。だが、友には宗教的理想郷を維持する資産があった。一方、ハーバートの暮らしは、父親の財産を引き継いだ長兄エドワードから支給される30ポンドの年金と、大学の職で得られるわずかの給金で成り立っていた。ところが、年金の方はエドワードがフランスやイタリアに滞在している間、滞ることがあった。長子相続制のもと次男以下は婚期が遅れることが多かったが[22]、ハーバートもこの時まだ結婚していなかった。国の要職に就くわけでもなく、確たる聖職者になるわけでもなく、宙ぶらりんの状態が続いていた。天職に就いていない不安を訴え、社会の役に立ちたいとの願望を披瀝した詩が残っている。

... and [I] wish I were a tree;
For sure then I should grow
To fruit or shade: at least some bird would trust
Her household to me, and I should be just. ("Affliction" [1] 57-60)

(木になることができればいいのだが、／そうすれば、きっと生い茂って／実を付けたり、木陰ができる。少なくとも鳥が信頼して／巣をかける、そうすれば、義となることができよう。)

Oh that I were an Orange-tree,

That busie plant!
Then should I ever laden be,
And never want
Some fruit for him that dressed me. (“Employment” [2] 21-25)

(ああ、オレンジの木になりたいものだ／あの働きものの木に／そうすれば、常に実をたわわに付けて／差し出すことができる／私を育て上げてくださった方にその実を。)

ハーバートは、これらの詩で、社会の一構成員として確かな歯車となれるなら、人間界から退位して植物界に属す木になってもいいとまで言っている。それらの言葉から、彼がジェントリー階級から身を落として、ある田舎の地方に根が生えたように踏ん張ろうとの決意の萌芽を読み取ることができる。

1627年6月、ハーバートのよき理解者でパトロネスであった母親が逝去。翌7月、ダンの葬送の説教と共に、ハーバートの追悼詩 (*Memoriae Matris Sacrum*) が出版登録される。詩の公刊から2週間後、チャールズ一世より、リベスフォードの荘園を兄エドワードを含む3人に賜る。だが、この荘園は、チャールズ一世より手切れ金の代わりに与えられた土地で、ハーバートの世俗的な出世は、この時点で、完全に絶たれたと考えることができる。彼が属していた派閥の中心者ペンブルック伯は、バッキンガム公との政権抗争に敗れ、急激に人事権を失いつつあった。伯がハーバートのために、ようやく見つけることができたのは、邸宅のあるウィルトンからさほど遠くない小村ベマトンの牧師職であった。けれど、その職こそ、実はハーバートが青年の頃から追い求めていた最終目標であった、と解すのがウォルトンの見方である。

ハーバートの「司祭職」と題する詩では、聖職者になることへの逡巡が詠まれているが、その理由は、その実務に耐えられるだけの健康状態ではないことが暗示されている。

But thou art fire, sacred and hallow’d fire;

And I but earth and clay: should I presume
To wear thy habit, the severe attire
My slender compositions might consume.
I am both foul and brittle; much unfit
To deal in holy Writ. ("The Priesthood" 7-12)

(あなたは火、それも神聖で、崇められる火、／だが、私はただの土塊。もし私があえて／僧衣を身に纏うことにでもなれば、その厳粛な衣は、／私のきゃしゃな身も心も焼き尽くすかも知れない。／私は汚れていて脆く、神の言葉を伝えるのに／相応しいとはいえない。)

ハーバートは、ケンブリッジの学生の頃より、瘧(ague)に悩まされていた[23]。また、"rheums" と呼ばれる水様分泌物が粘膜から流れ出ることもあり、おそらく、彼の命を奪うことになる「肺病」(consumption) の徴候であった。気力は人一倍充実していたが、それを支える体力が伴わなかったのが、現状であったと思われる。病気の母を励ますために送った手紙で、「私は常に死よりも病を恐れています。病ゆえにこの世に生まれてきた役目を果たせていないからです」[24] と、不甲斐なさを訴えている。だが、土塊である人間、それは卑しい原料 ("lowly matter" l. 35; "mean stuffe" l. 38) で造られた素焼きの器も同然であるが、神の巧みな腕前 ("cunning hand" l. 13) によって、貴族の食卓を飾る陶磁器に変わるという。かつては、その司祭職を軽蔑していたが ("wretched earth. / Where once I scorn'd to stand" l. 15)、神の御業を信じて聖職者になる覚悟を決めた。

ハーバートは、1629年3月、35歳の終わりに、ダンヴァーズ家の親戚の娘と結婚する。彼が人生の目標とした聖職者になったのは、37歳の時であった。すなわち、1630年4月に教区牧師(rector)となり、9月には聖典礼を執行する司祭に任命された。そのあと3年間という短い間であったが、妻ジェーンとその任を立派に果たし、1633年3月、肺結核のため、40歳を目前に逝去した。聖職者になると確固とした決意に達したあとの、何とも短い、皮肉な最期であった。

And then when after much delay,
Much wrastling, many a combate, this dear end,
So much desir'd, is giv'n, to take away
My power to serve thee; to unbend
All my abilities, my designes confound... ("The Crosse" 7-11)

(そして、そのあと、長々と待たされ、／さんざん努力し、格闘したあと、この得難き目標が／かくも熱望されていたのだが、叶えられると、／あなたにお仕えする力は奪われ、才能もすべて／鈍ってしまい、計画もだめになった。)

この詩のタイトル "The Crosse" とは、第一義的には、「十字架」のことであるが、その意味の他に、「交差」も込められている。つまり、神に祈り、望みが叶えられたときに、まさにその時、神によってすべて奪われてしまうという、人間と神との「行き違い」が詠まれている。だが、人間の側から見た、その「行き違い」を神慮と達観し、恭順になれるところに、ハーバートの信仰があったのだと思う。神意のままに教区の人々に尽くしたハーバートは、その御業によって「ベマトンの聖人」と仰がれるようになった。ハーバートの聖人像を後代にまで決定的にしたのは、先に述べたようにウォルトンであるが、兄エドワードも弟ジョージの「聖人」としての風評を『自叙伝』(1764年死後出版) で伝えている。「弟のジョージは優れた学者でケンブリッジ大学の大学代表弁士となった。(中略) 弟は生涯とても信心深く、人々の手本であった。何年もの間、僧禄をもらい暮らしていたソールズベリー界隈では聖人と崇められるほど、弟の人生はとても清く、模範であった」[25]。短いながら、肉親の記録で嘘偽りはないであろう。

附記:「ジョージ・ハーバートの聖職者になることへの逡巡」(後) につづく

註

1) ティルマン氏が悩んでいたのは、自身の性格的な事柄であった。つまり、移り気、色欲、激情、

野心それに謙虚のなさである。"Mr. Tilman of Pembroke Hall in Cambridge his motives not to take orders" in Harvey H. Wood, "A Seventeenth-Century Manuscript of Poems by Donne and Others," *Essays and Studies* 16 (1930) : 184-86.

2) ダンは法学院リンカーンズ・インを出たあと、1596年と97年に好機と出世を求めてエセックス伯に同行して海外遠征に加わった。その時、トマス・エジャトンに知己を得、その父親でやはり同名のトマス・エジャトン国璽尚書の秘書となった。これでダンもパトロンを得て、昇進・抜擢の足掛かりを掴んだかにみえたが、彼の経歴に破滅をもたらしたのはアン・モアとの秘密結婚であった。彼女は故エジャトン夫人の姪で、17歳、エジャトン家に同居し、ダンと恋に落ちた。これを知った花嫁の父ジョージ・モアは激怒し、義理の兄エジャトンにダンを秘書の職から解くよう迫り、応諾された。この秘密裡の結婚ゆえに、ダンは俗世間での出世に阻まれ、永らく後悔することになった。(アーサー・F・マロッティ「ジョン・ダン——パトロン制度から受けたもの」舟木茂子訳、ガイ・フィッチ・ライトル、スティーブン・オーゲル編著『ルネサンスのパトロン制度』[松柏社 2000年] 所収、307-14頁)

3) 1615年1月23日、ダンは国教会の執事そして司祭に叙品されたあと家に戻ると、友人にそのことを知らせる手紙を書いた。エドワード・ハーバートに宛てた「聖職者になったまさにその日に」と記された手紙が残っている。(*John Donne: Complete Poetry and Selected Prose*, ed. John Hayward [London: The Nonesuch Press, 1941] 465-6) Cf. R. C. Bald, *John Donne: A Life*, ed. Wesley Milgate (Oxford: Clarendon Press, 1970) 302-6.

4) "In this time of Retirement, he [G. Herbert] had many Conflicts with himself, Whether he should return to the painted pleasures of a Court-life, or betake himself to a study of Divinity, and enter into Sacred Orders?" (Izaak Walton, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*, ed. George Saintsbury [London: Oxford University Press, 1966] 276-76) 以後、ウォルトンのハーバート伝の引用はこの版による。

5) ダンの詩の引用は、前掲書 (*John Donne: Complete Poetry and Selected Prose*, ed. John Hayward) による。なお邦訳は、湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』(名古屋大学出版会 1996年) を参照した。

6) ルカ福音書 (9章62節) に云く、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」(『聖書 新共同訳』[日本聖書協会 1987年])。ハーバートも、『田舎牧師』第2章で「鋤」を聖職の意味で用いている。「聖職入りするまでは、彼ら [チャプレン] は友人や話し相手として迎え入れられるかも知れないが、一旦聖職者になれば、鋤を捨て去り還俗するまで、聖職者としての役目を果たそうという気がなければ、どんな邸宅にも出入りすることを許されない。」(試訳)

7) ダンは自らの叙品を記念して、ジョージ・ハーバートに「錨とキリストの印章とともに」というラテン語の書簡詩を送り、「神の家族の一員として受け入れられることになって、旧い家紋を捨て、新しい紋章に移ることにしました」と述べている。(Heyward, 327；湯浅訳 399頁)

8) ハーバートの詩及び散文の引用は、*The Works of George Herbert*, ed. F. E. Hutchinson (1941; corr. rpt. Oxford: Clarendon Press, 1945) による。なお、詩の邦訳に関しては、鬼塚敬一訳『ジョージ・ハーバート詩集』(南雲堂 1986年)、『続ジョージ・ハーバート詩集』(南雲堂 1997年) を参照した。

9) 1631年10月13日付けのアーサー・ウッドノス (Arthur Woodnoth, c. 1590- c. 1650) からニコラス・フェラーに宛てた手紙によると、ウッドノスはハーバートの継父ダンヴァーズのもとで働いていたが、どうも芽が出そうにもなく、転職のことでハーバートに相談を持ちかけたという。翌日になって、ハーバートは七項目に亘ってダンヴァーズのもとに止どまるよう、勧告した。その最後の項目に付け加えて、ハーバートは自分の職業倫理を次のように表している。「生業を辞めようという気持ちが少しでもあるのなら、捨て去りなさい。人に職業を続けるように勧めるのは、怠惰を防ぐことになるからです。何もしないで無為な生活をするより働きなさい。しかし、神が私に崇高な考えをお与えになったように、さらによい仕事を選びそして神の恩寵を得て出世することは、許容されるばかりか称賛されるべきことであります。聖職者と役人の場合は別で、一方は神の遣いで、もう一方は国家の使いであり、したがって、主人の同意なしに辞めることはできません。」(*The Ferrar Papers*, ed. B. Blackstone [Cambridge: Cambridge University Press, 1938] 270)

10) Michael G. Brennan, *Literary Patronage in the English Renaissance: The Pembroke Family* (London: Routledge, 1988) 153-54; Cristina Malcolmson, *Heart-Work: George Herbert and the Protestant Ethic* (Stanford: Stanford University Press, 1999) 46-95; *George Herbert: A Literary Life* (New York: Palgrave Macmillan, 2004) 1-19.

11) John Aubrey, *Aubrey's Brief Lives*, ed. Oliver Lawson Dick (1949; Jaffrey, New Hampshire: David R. Godine, 1999) 137.

12) *The Diaries of Lady Anne Clifford*, ed. D. J. H. Clifford (Phoenix Mill, Gloucetershire: Sutton, 1990) 88-91. アン・クリフォード夫人は、1590年1月に第3代カンバーランド伯ジョージ・クリフォードの娘としてこの世に生を受ける。幼少の頃、詩人のサミュエル・ダニエルが家庭教師を務める。以後、シドニー、スペンサー、モンテーニュ、オウィディウスそしてアウグスティヌスや聖書などを読みあさる。1609年2月にリチャード・サックヴィル (すぐあとドーセット伯に就任) に嫁ぐが、父の遺産相続問題や夫の不倫のため不幸な結婚生活を送る。ドーセット伯の死後、しばらく寡婦を通していたが、1630年6月に第4代ペンブルック伯フィリップ・ハーバートと再婚する。再婚相手とは不仲で、遠戚に当たるハーバートが心の支えになったに相違ない。Cf. Martin Holmes, *Proud Northern Lady: Lady Anne Clifford 1590-1676* (1975; corr. rpt. Chichester, West Sussex: Phillimore, 1984) 126-8; and Graham Parry, *The Seventeenth Century: The Intellectual and Cultural Context of English Literature 1603-1700* (London: Longman, 1989) 79-80.

13) ハーバートの「パロディ」と題する詩は、ペンブルック伯ウィリアム・ハーバートの世俗的な詩を宗教詩に置き換えたものであるが、チューヴが論証したように、内容に対する返歌ではなく、単にメロディを借りた替え歌である。Rosemond Tuve, "Sacred 'Parody' of Love Poetry, and Herbert" in *Essays by Rosemond Tuve: Spenser, Herbert, Milton*, ed. Thomas P. Roche, Jr. (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1970) 207-49.

14) ウォルトンの『ジョン・ダン博士の生涯』によると、ダーラムの司教トマス・モートンは、1607年にグロスターの首席司祭に任命されたのを受けて、ダンにも国教会の聖職者になるよう勧めた。ところが、ダンは若き日の放埒な生活が人々に知れ渡っていること、そして、今この申し出を受ければ、不純な動機から聖職に就く羽目になってしまうことを理由に断ったという。ダンには、神の栄光を賛美することを動機の第一に、生活の資を稼ぐことを第二にしたい、という気持

ちがあったらしい。(Walton, 32-4) さらに第三の理由としてヘレン・ガードナーが指摘するのは、僧職禄の多寡である。つまり、他の職業と比べて、聖職が仕事量の多さにもかかわらず見返りが少ないことが、人々から嫌われる職業である所以である。(Helen Gardner, commentary to *The Divine Poems* by John Donne, (1952; rev. ed. Oxford: Clarendon Press, 1978) 127-32.

15) 註4) 及び "he [Nicholas Ferrar] shall find in it [this little book, ie. *The Temple*] a picture of the many spiritual Conflicts that have past betwixt God and my Soul, before I could subject mine to the will of *Jesus my Master*: in whose service I have now found perfect freedom..." (Walton, 314) を参照。だが、ウォルトンの伝記を宗教的熱意ではなく、より理性的・科学的に検証したノヴァーは、ウォルトンの議論の中核は正しいにしても、「精神的葛藤」の度合いは誇張で捏造に近いと主張する。なぜなら、ウォルトンには、上流階級出身の田舎の聖職者像を造り上げ、聖職が決して卑しい職業ではないということを世間に知らしめる意図があり、ハーバートの生涯を歪曲したというのである。(David Novarr, *The Making of Walton's* Lives [Ithaca: Cornell University Press, 1958] 301-61) ヘレン・ガードナーもノヴァーの説を支持して、ハーバートが身に感じた葛藤は世俗と聖職との間ではなく、いかにして神の御意に心から従えるようになるか、その過程にあったと断じている。(Helen Gardner, introduction to *The Poems of George Herbert* [Oxford: Oxford University Press, 1961] xvii) ところで、ハーバートが聖職者になる決意を固めた時期に関して、ウォルトンは、1625年以後としている。(Walton, 276-8) その時期を前後して、ハーバートの庇護者である、リッチモンド公、ハミルトン侯そしてジェイムズ一世が亡くなったのを理由に挙げている。ヘレン・ホワイトは、聖職入りを強く希望していた母親の影を重視し、母親の死を契機に、即ち1627年6月以後に執事になったと考える。(Helen C. White, *The Metaphysical Poets: A Study in Religious Experience* [New York: Macmillan, 1936] 154-60) ハッチンソンも、母親の死後説を唱えるが、その理由は、ホワイトとは異なり、大学代表弁士の職を強く望んでいた母親の存在がなくなったからと考える。(F. E. Hutchinson, *Works*, xxix-xxxi) ジョセフ・サマーズは、ハーバートの世俗的な出世の望みが絶たれたのは、1623年8月8日で、チャールズ皇太子がスペインから皇女を連れずに帰国したとき行なった式辞の内容 (スペインとの戦争反対) にあるとする。ハーバートが聖職入りを決意するのは、1625年6月18日から8月12日までの議会の会期中と見る。その間にペンブルック伯の反対派であるバッキンガム公が勢力を得るようになって、人事を手中に収めるのを目の当たりしたからだと考えている。(Joseph Summers, *George Herbert: His Religion and Art* [1954; rpt. Binghamton, N. Y.: Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1981] 36-48) エイミー・チャールズは、1624年11月か12月にハーバートは世俗の出世に背を向けたとするが、当初から聖職者になること考えていたと主張する。(Amy Charles, *A Life of George Herbert* [Ithaca: Cornell University Press, 1977] 104-12) ダイアナ・ベネトは、チャールズ同様、1624年を、ハーバートが聖職者になる決意をした重要な年と見て、その当時の状況を政治的に検証した。(Diana Benet "Herbert's Experience of Politics and Patronage in 1624," *George Herbert Journal* 10, nos. 1 and 2 [fall 1986/7]: 33-45; *Secretary of Praise: The Poetic Vocation of George Herbert* [Columbia: University of Missouri Press, 1984] 6-14)

16) Michael C. Schoenfeldt, *Prayer and Power: George Herbert and Renaissance Courtship* (Chicago: University of Chicago Press, 1991); Jeffrey Powers-Beck, *Writing the Flesh: The Herbert Family Dialogue* (Pittsburg: Duquesne University Press, 1998); Cristina

Malcolmson, *Heart-Work: George Herbert and the Protestant Ethic; George Herbert: A Literary Life*; and Ronald W. Cooley, *"Full of all knowledge": George Herbert's* Country Parson *and Early Modern Social Discourse* (Toronto: University of Toronto Press, 2004).

17) "For my own part, my meaning (*dear Mother*) is in these Sonnets, to declare my resolution to be, that my poor Abilities in *Poetry*, shall be all, and ever consecrated to Gods glory." (*Works*, 363)

18) "You know Sir, how I am now setting foot into Divinity, to lay the platform of my future life...it is true (God knows) I am weak, yet not so, but that every day, I may step one step towards my journies end." (*Works*, 364)

19) "At which answer, the King smil'd...for he took him to be the Jewel of that University." (Walton, 271)

20) "The Orators place...is the finest place in the University, though not the gainfullest; yet that will be about 30 *l. per an.* but the commodiousness is beyond Revenue; for the Orator writes all the University Letters, make all the Orations, be it to King, Prince, or whatever comes to the University..." (*Works*, 369)

21) 1624年前後のハーバートを取り巻く政治的状況の議論は、主に以下の研究書による。Robert E. Ruigh, *The Parliament of 1624: Politics and Foreign Policy* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1971); Cristina Malcolmson, *Heart-Work*, 15-25; T. H. Howard-Hill, introduction to *A Game at Chess* by Thomas Middleton (Manchester: Manchester University Press, 1993) 10-48.

22) Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (1977; abr. ed. New York: Harper and Row, 1979) 40-42.

23) マラリアに似た間歇熱。原因は不明だが、一説に麦角中毒症ともされる。(メアリー・キルバーン・マトシアン、荒木正純他訳『食物中毒と集団幻想』[パピルス 2004年] 28-36頁参照) 1610年母親に宛てた手紙に、すでに瘧が言及されている。"But I fear the heat of my late Ague hath dryed up those springs, by which Scholars say, the Muses use to take up their habitations." (*Works*, 363)「苦悩」(1) では、瘧は血管内に宿っていて、呻き声を上げさせるほどの苦痛を与える。"Consuming agues dwell in ev'ry vein, / And tune my breath to grones." ("Affliction" [1] 27-8)「十字架」では、瘧は骨と魂に巣くい、身体を弱らせる。"One ague dwelleth in my bones, / Another in my soul... / I am in all a weak disabled thing..." ("The Crosse" 13-7) なお、瘧は家系的な病気で、兄エドワードも、1617年頃、四日ごとに起こる瘧に見舞われた。(Edward Herbert, *The Life of Lord Herbert of Cherbury*, ed. J. M. Shuttleworth [London: Oxford University Press, 1976] 87)

24) "I alwaies fear'd sickness more than death, because sickness hath made me unable to perform those Offices for which I came into the world... (*Works*, 373) Cf. Nick Page, *George Herbert: A Portrait* (Tunbridge Wells, Kent: Monarch, 1993) 87ff.

25) "My Brother Goerge was so excellent a Scholar, that he was made the public Orator of the University in Cambridge...his life was most holy and exemplary; in so much that about Salisbury where he lived beneficed for many years, he was little less than Sainted." (Edward Herbert, *The Life*, 8-9)